

外国籍児童生徒への学習サポート

— 大学生ボランティアを中心とした活動その後 —

藤 本 久 司

要旨：三重大学生が主になり 2005 年から外国出身の子どものための学習サポートボランティアを継続している。ここでは 2007 年 9 月以降の 2 年間の経緯を記録し、日々の活動報告、サポートする側と子どもたちのアンケート回答などに現れた生の声を集約し分析する。そこには、サポートする側のスキルアップへの工夫や努力がみられるとともに、子どもの背景や学習の実態に対する理解と戸惑いが交錯する。また、変化しつつある外国人住民の状況、地域的な特徴、出身国による親子や家族の相違点なども読み取ることができる。

1. はじめに

2005 年 9 月、三重大学生と教員、社会人有志が集まり、日本語が母語ではない外国籍児童生徒への教科学習支援活動を開始した。このボランティアグループは名前を「ジョイア」と名付け、活動は現在まで続いている。当初、進学希望の中学生をサポートすることから始まったこの活動については、開始以降 1 年間、2006 年 7 月までの経緯を『人文論叢』第 24 号（2007）に掲載した（藤本・江成共著）。その後、サポートの対象を「小学生から高校生まで」に広げ、活動日も変化し、メンバーの大学生、社会人ともほとんど入れ替わったが、活動の理念は引き継がれ、多くの子どもたちと出会い、経験を積み重ねている。本稿では 2006 年 9 月から 2008 年 8 月までのジョイアの活動の経過と記録、サポートを受けた子どもたち及びボランティアスタッフへのアンケートの回答分析を交え、報告する。

2. 三重県の外国人住民と津市の外国籍児童生徒

活動の背景となる津市の外国籍児童生徒の状況を述べるにあたり、三重県の外国人住民の最近のデータを把握し、津市の特色を確認しておきたい。

三重県が 2008 年 2 月に公表した『県内の外国人登録者数が 5 万人を超えました —— 外国人登録者数調査（平成 19 年 12 月 31 日現在）の結果』によると、そのタイトル通り 2007 年末現在の三重県の外国人登録者数は 51,638 人で、初めて 5 万人台となり、総人口に占める比率は過去最高の 2.70% となった。法務省の『平成 20 年版在留外国人統計』及び『広報資料：平成 19 年末現在における外国人登録者数について』では、統計手法上の基礎数値の違いもあり外国人登録者数 51,835 人、人口比 2.76% となっており、人口比は愛知県（3.02%）、東京都（3.00%）に次ぎ、前年と同じく全国 3 位の位置にある。国籍順ではブラジルが全体の 4 割で、以下は中国、韓国又は朝鮮、フィリピン、ペルー、ボリビアと続く。

津市は三重県の同報告書で登録者数 9,114 人であり、県内では鈴鹿市（10,074 人）、四日市市（9,685 人）に次いで多い。国籍順はブラジル、中国、フィリピン、韓国又は朝鮮、ボリビ

ア、ベトナムとなっており、県内のポリビア国籍 1,265 人のうち、半数近く（586 人）が津市内に住んでいるのが特徴の 1 つである。

児童生徒数にもこのことが現れている。津市教育委員会の統計によると、2008 年 5 月 1 日現在、津市内の公立小中学校に在籍する外国籍生徒は小学生 286 名、中学生 110 名、計 393 名であるが、国籍別では小学生のうち 182 名がブラジル、次いで、ポリビア 31 名、フィリピン 23 名、ペルー 14 名の順になっており、中学生ではブラジル 71 名、ポリビア 16 名、フィリピン 8 名の順である。小中学校とも人数ではブラジルの子どもが 6 割以上を占めていることとともに、他県や県内他市に比べポリビア国籍の子どもが多いことが目立つ。

そのことは本稿の学習サポート活動にも大きく関係している。第 4 項のアンケートの数値にも現れるように、活動当初から参加者に占めるポリビア国籍の児童生徒の割合が一番多いという状態が続き、本稿執筆対象の 2008 年 8 月時点では、活動に関わる小中学生の過半数がポリビアとなっている。地域的にポリビアからの移住者コミュニティが確立し、情報が行き届いていることも大きな要因と思われる。

なお、三重短期大学地域問題総合調査研究室の報告書（2008）によると、2007 年 8 月 1 日時点に津市で外国人登録をしている就学年齢の子どもの数 595 人のうち、日本の学校に通っている者 381 人、外国人学校に通っている者 73 人、不就学 17 人、帰国・転居等による不明者は 124 人という調査結果になっている。また、外国人学校 3 校はすべていわゆるブラジル学校であると報告されている。従って、上記の 2008 年 5 月 1 日時点の市内公立小中学校在籍者 393 名以外にも、ブラジルを主とした 70 名前後の子どもが市内に在住しブラジル人学校に通学していると推測される。このことから、現実子ども数に占めるブラジルの割合は更に高くなり、全体の約 7 割であると考えられる。

3. 学習サポートボランティア「ジョイア」の 2006 年 9 月から 2008 年 8 月までの活動

1) 活動の概要

日時：[2006 年 11 月まで] 水曜日 午後 4 時半～6 時半

[2006 年 12 月から 2007 年 3 月まで] 水曜日 午後 4 時半～6 時半、
及び土曜日 午前 10 時～12 時

[2007 年 4 月から] 土曜日 午前 10 時～12 時

場所：津市羽所町 アスト津 3 階交流スペース

対象：出身地や家庭の言語が日本語でないため日本の学校での教科学習に問題がありサポートを必要とする小中学生、高校生（2006 年 11 月までは中学生が主な対象）

2) 活動の経緯

上記の通り、活動日時は 2006 年 4 月から毎土曜日午前になり、現在に至っている。活動場に通える外国籍の小中学生、高校生を対象にしているが、本稿対象期間の 2 年間に参加したのは主に津市内の小中学生であった。高校生は時折来訪したが、継続的参加者はいなかった（従って、以下の記述には現実的に、「小中学生対象」と記載する）。スタッフのほとんどは月の活動日のうち自分の都合の良い日を選び参加するため、サポートする子どもとスタッフの組み合わせは常に同じというわけではない。当日どのようなサポートをしたかについては各子ど

も別に記録し、ファイルに綴じ、日によりサポーターが変わっても、サポート内容を確認できるようにしている。

ジョイア本来の土曜日午前の活動以外にも活動が広がった。2007年4月から津市教育委員会人権教育課が主催し高茶屋市民センターで開始した「こども日本語学習クラブ」のサポート(毎週1回)に毎回2名が参加した。このサポートは1年間続き、スタッフ全体の数や交通の便の関係で2008年3月をもってサポートへの参加を一旦停止した。2007年6月からは亀山市立亀山西小学校での日本語教室「なかよしくらぶ」(月2回)に1、2名がスタッフから参加し、現在も続いている。

また、2006年度及び2007年度には、三重大学内の国際交流基金助成金を申請し、サポート用教材を随時補充した。

① 学習サポート活動の経緯

a. 2006年9月から2006年11月まで [3ヵ月間：水曜日の活動：中学生対象]

活動回数	10回
スタッフ数	14名(大学生10、教員2、社会人2)
1回当たりスタッフ参加人数	3～5名
参加した子どもの実人数、国籍	12名(ボリビア、ブラジル、ペルー、フィリピン、コロンビア) *小学生も少数随時参加
1回当たり子どもの参加人数	0～5名

b. 2006年12月から2007年3月まで [4ヵ月間：水・土曜日の活動：小中学生対象]

活動回数	25回
スタッフ数	12名(大学生9、教員2、社会人1)
1回当たりスタッフ参加人数	2～5名
参加した子どもの数、国籍	15名(ボリビア、ブラジル、ペルー)
1回当たり子どもの参加人数	0～5名

c. 2007年4月から2008年8月まで [17ヵ月：土曜日の活動：小中学生対象]

活動回数	52回
スタッフ数	19名
1回当たりスタッフ参加人数	3～8名
参加した子どもの数、国籍	27名(ボリビア、ブラジル、ペルー、フィリピン)
1回当たり子どもの参加人数	3～11名

d. 2008年7、8月時点での参加者数

スタッフ数	15名(大学生・院生10名、教員2名、社会人3名)
参加している子どもの数	12名(ボリビア9名、ブラジル3名)

* a. b. c. d. いずれも、1～3回限りの参加者はスタッフ数、子どもの数の双方とも含んでいない。

② 学習サポート以外の活動の経緯

- 2006年12月 小中学校配布用の「学習サポートのお知らせ」を作成
- 2007年3月 津市教育委員会メンバーとともに津市内の5つの小中学校を訪問
学習サポートの子どもへの紹介を依頼
- 4月 津市高茶屋市民センターの「こども日本語学習クラブ」スタート（土曜日夜）
ジョイアメンバーも2名ずつ毎回交替でサポート参加開始
- 6月 亀山市立亀山西小学校の日本語教室「なかよしくらぶ」（毎月2、4水曜日
午後）に
ジョイアメンバー2名がサポート参加開始
- 6月 市の広報紙「あけぼの」掲載のためジョイア紹介の取材
- 8月 子どもたちの希望を受け、8月に2回のサポート。9月も毎週活動
- 10月 「広報・津」第44号折り込み「あけぼの」第3号にジョイアの紹介記事
掲載
- 11月 「ジョイア」メーリングリストで毎回の活動報告発信を開始
- 2008年3月 イオングループ「サティ」津店のボランティア募金「しあわせの黄色いレ
シート」メンバーに登録
- 3月 参加者の家族用説明書「家族の皆さんへ」の6カ国語のチラシを作成
- 3月 高茶屋の学習クラブへのサポート参加を停止
- 5月 2008年度のジョイアの活動を開始

3) 「活動報告」から見えること

随時行っているミーティングの合意の1つとして、2007年11月から、毎週の活動の記録をスタッフ全員にメーリングリストで送信することになった。当初、人数の記録として始めた送信だったが、その日の大学生スタッフが交互にまとめた報告内容には子どもたちの数と学習の様子、スタッフ数の記録とともに、工夫や苦勞、サポートへの思い、冷静な分析などが記載され、有意義な記録となった。土曜日夜の高茶屋市民センターでのサポート報告もあわせ、以下にそのいくつかを抜粋し記載する（できるだけ原文に基づき記述する。ただし、報告者名はイニシャルで表し、活動内容以外の部分や個人名、表記誤りや表記のアンバランス等は適宜省略又は訂正した）。

① ジョイア〈土曜日午前〉の活動報告（抜粋）

日 時	報 告 内 容
2007. 11. 24	子ども…6人。ボランティア…3人。今日はボランティアの人数が足りなくて大変でした(>_<) I/Y
2007. 12. 1	学習者5名、サポーター5名でした。学習者が集まった時間が普段よりおそかったです。今日は走り回るといことはなく、長い間席についていました。集中力は学習者によりけりでしたが…。H/C
2007. 12. 8	子ども7人、ボランティア6人でした。時折、騒がしくなる時もありました。しかし、今日はいつもは騒ぎ出す子も含め、みんなが各自の宿題などを使い、しっかりと勉強していたので、とても嬉しく感じました。I/Y

2007. 12. 15	子ども…4人、スタッフ…4人、プラス高校生5人。今日は津高の生徒さん5人が来てくれました。見学だけでなく、実際に子どもに勉強も教えてくれて、こちらも助かりました…！ 人権学習の一環ということでしたが、高校生の皆さんに色々なことを感じてもらえたのではないかと思います。また、私たちも色々な質問を受けて、改めて考えたことがたくさんあり、よかったです。N/I
2008. 1. 12	今日はスタッフの数が少なく(2人)で、サポートがしっかり出来ませんでした。児童は6人来ていました。学習ではないのですが、今日は児童2人とパズルを完成させました。のりづけもして、大事そうに持って帰りました。また、7月くらいから来ていなかった男の子が来てくれました。チラシ配布の効果だと思います。H/C
2008. 2. 2	子どもが9人、スタッフが5人でした。スタッフの数が足りず、しっかりと勉強をみてあげることができませんでした。がんばって勉強する子もいましたが、全くしない子もいて、その子が他の子の気を散らしてしまう…という困った状態でした。喧嘩もあり、落ち着いて勉強できなかったと思います。また、「パソコンは1度に2台まで、1人15分ずつ順番に」というルールを決め、子どもたちに伝えましたが、守らない子もいました。勉強をやりたくない子に、どうやって集中して勉強をさせるか…。とても難しい問題だと感じました。K/E
2008. 2. 9	今日は子ども7人スタッフ5人でした。すごくいい雰囲気勉強できていたように思いました。新しく中学生のブラジルの女の子が2人きてくれてすごく一生懸命に取り組んでいました。 終わったあとに時間帯について今日いるメンバーで話を子どもたちにも意見を求めました。子どもたちは12時までいなければいけないと思っていたようで11時30分までがいい子もいれば12時までがいい子もいて貴重な意見をたくさん聞けたように思います。I/K
2002. 2. 16	子ども8人、スタッフ3人でした。隣で会議があり、それを子どもたちも気にしてか、静かに頑張っている子が多かったです。この前、いろいろ決めて、パソコンの時間なども決めてあったので、遊びたいと言っていた子も時間を守っていました。やはり、子どもたちの意見を聞きながら決めた事で、良い結果になったと思います。K/M
2008. 3. 15	今日は子ども9人、スタッフ6人でした。今期最後という事でたくさん来てくれました。今日は子どもたちに最後のご褒美として、ノートや消しゴムを渡しました。皆さんお疲れ様でした☆ K/M
2008. 5. 10	子ども3人スタッフ8人でした。新入生の方が3人ほど見学にきてくれました。初回なのでまだ本格的にしっかりと勉強とはいきませんでした。前決めたとおりのルールを守ってくれました。どうしたらちゃんと勉強するようになるのかを考えることが今後の課題だと思います。I/K
2008. 5. 17	子どもたち6人スタッフは新しい人を含めて8人でした。今日は中学生がまじめに勉強しているのが印象的でした。小学生の一部はいつもより集中力がなかったので早くからパソコンを始めてしまいました。 子どもたちに活動後ジョイアのプリントを配っておきました。新たに加わってくれるメンバーも出てきているので1対1でのサポートが今のところできそうです。I/K
2008. 7. 12	今日は子どもたち3人、スタッフ11人でした！たくさんスタッフの方々に来てもらったのですが子どもたちが少なくて残念でした。 今日の活動では、子どもたちがみんな熱心に勉強できていてとても良かったです。担当するスタッフを変えていく方が子どもたちも新しい気持ちで緊張感を持って勉強できるのではないかと思います。K/M
2008. 7. 26	今日はスタッフ3人、子ども8人でした。8人の内4人は新しく来た子でした。4人の中の三人は水曜日夜の「ひるがお」でジョイアを聞いて来た子でした。夏休みになったためか、夏休みの宿題をしている子どもが多かったです。人数の割にはそこそ静かに勉強できたと思います。1対多になったので一人一人細かくまで見ることは出来ませんでした。F/S
2008. 8. 30	今日はスタッフ4人に対して子ども10人と多く、子どもの2人は今日初めてやって来た子でした。その内の1人はあまり日本語も話せない子どもだったので1対1の状態でした。普段来る子どもたちはこの場所での要領を得ているのか「手のかからない子」状態でしたが勉強をするにあたってはいささか集中力散漫でした。F/S

② 高茶屋「こども日本語学習クラブ」〈土曜日夜〉の活動報告（抜粋）

日 時	報 告 内 容
2007. 12. 8	今日は子ども4名、スタッフ4名（うちジョイア1名）でした。 初めにカルタで遊びながら数の数え方の練習などをし、後半は二手に分かれ、片方は折り紙、もう片方は読み書きの練習をしました。 折り紙組はみんなでシュリケンや飛行機を作り、読み書き組は子どもたちがポルトガル語をスタッフに教えてくれたりして、スタッフも一緒に楽しく勉強できました。 H/A
2007. 12. 22	今日は、大人の部と子どもの部を合わせて、少し早いクリスマス会がありました。みんなで食べ物などを持ち寄ったり、プレゼント交換をしたりしました。今日の子どもの人数は2人でした。K/M
2008. 2. 2	今日は子ども一人、スタッフ4人と、子どもは少なかったです。初めにひらがなのビンゴとかるたをし、最後の20分は大人の教室と一緒に豆まきをしました。日本の行事も知ってもらえてよかったと思います。H/A
2008. 2. 9	今日は子ども6人、スタッフ4人でした。雪だったのでゼロを覚悟していましたがバラバラとやって来ました。活動はカルタ、ひらがなビンゴ、学習プリント、折り紙をしました。 ジョイアと同じですが、やはり隣で何か楽しそうなことをやっていると、せっかく勉強していたのに気が散ってしまう子もいて（低学年以下だと特に）、集中力を持続させるのは難しいと思いました。N/I

4. 外国籍小中学生及びサポートスタッフへのアンケート——結果と分析

当事者の生の声を把握、分析し、今後の活動に役立てるため、サポートを受けた外国籍小中学生、サポートした「ジョイア」スタッフを対象に、2007年3月から2008年8月までの間、アンケートを行った。アンケートの期間が長かったのは3月まで活動し卒業した当時の大学4年生、及び、主に3月までサポートを受けた子ども、4月以降に活動を開始したスタッフの一部、及び、4月以降にサポートを受け始めた子どもなどを含んだためである。以下にそれぞれ質問項目別の結果と補足、分析を記述する。

1) 学習者（小中学生）のアンケート回答、及び分析

日本語ルビ付きの質問用紙を準備し、裏面に同じ意味のスペイン語、ポルトガル語を記載したが、全員、日本語で回答した。

①&② 回答者の区分・性別・学年

区分・性別	人 数	備 考
小学生男子	4	1年生1、4年生1、5年生2
小学生女子	7	4年生2、5年生3、6年生2
中学生男子	2	1年生1、3年生1
中学生女子	2	1年生1、3年生1
計	15	全員が津市内の公立学校通学

- ・必ずしも対象期間中に参加した全員を対象に調査できていないが、参加者の内、複数回継続して参加した大部分の子どもから回答を得ることができた。
- ・時期や季節による偏りはあるが、長期的に見ると、小中学生の各学年の子どもがバランスよく参加している。

③ 生まれた国

国名	人数	備考
ボリビア	5	
日本	7	親はボリビア3、ブラジル3、ボ+ブ1
ブラジル	2	
未記入	1	
計	15	

- ・津市の居住者では「ブラジル」が多いが、学習者で圧倒的に「ボリビア」が多い。第2章で述べたような背景に加え、親戚関係、友人関係の者同士、お互いに誘い合って参加者が増えた一面もある。
- ・また、ボリビア出身者コミュニティの中の家族間で、良い意味の教育への競争意識が生まれていることも一因と考えられる。

④ 親の出身国

国名	人数	備考
ボリビア	8	
ブラジル	5	
ボリビアとブラジル	1	
未記入	1	
計	15	

- ・親は「ボリビア」が多いが、子どもは日本生まれが多い。親と異なるアイデンティティの問題や親との言葉のギャップなど、世代間の生育環境の違いから家庭内の教育力の問題を含んでいる。課題等詳しくは5章に記述する。

⑤ 将来住みたい国

国名	人数	備考
日本	4	
アメリカ合衆国	3	
ブラジル	3	
ボリビア	2	
その他	1	
未記入	2	
計	15	

- ・現在、回答者全員が日本で成長し、日本語で話し、日本の学校に通っているにも関わらず、「日本」が15名中4名と少ないのは残念な数値である。外見が外国人である彼らにとって、「日本=安住の地」でない事実を示唆しているのかもしれない。
- ・アメリカ合衆国に縁がない者がほとんどであるが、回答は「アメリカ合衆国」が多い。多民族国家であること、エスニックに関わらず将来の可能性が大きい、母国が近くイメージが明確である、などの要因が考えられる。

⑥ 自分が一番得意な言葉

種 類	人 数	備 考
日本語	6	
日本語とスペイン語	2	
日本語とポルトガル語	3	
日本語とスペイン語とポルトガル語と英語	1	
スペイン語	1	
ポルトガル語	2	
計	15	

- ・「一番得意な言語」と尋ねているにもかかわらず複数に○をつける子どもが多い。その他「日本語」「スペイン語」「ポルトガル語」とだけ答えた子どもも、学習中はスタッフと日本語で、子ども間では母語・日本語を交えて会話をしていることが多く、サポートに参加している子どもたちの大半はバイリンガル、トリリンガルであると言える。

⑦ 家庭で主に話す言葉

種 類	人 数	備 考
日本語	0	
日本語とスペイン語	2	
日本語とポルトガル語	2	
日本語とスペイン語とポルトガル語	1	
スペイン語	5	
ポルトガル語	4	
未記入	1	
計	15	

- ・家庭（親子間）で日本語を主要言語にしている者はゼロである。
- ・子ども自身が得意であるかどうかに関わりなく、家庭では主に親の話す言葉で会話している。概して親の日本語レベルが子どもより低いため、親子間で日本語を使うことがあっても、子どもが使うので補足的に併用しているだけ、というケースが多いと推測される。

⑧ どの科目のサポートを受けましたか？（複数回答）

小学生（11名）	算数 11、国語 9、社会 4、理科 3、英語 2、日本語 1
中学生（4名）	数学 3、社会 3名、理科 3、英語 2、国語 2名、日本語 1

- ・算数、数学が多い。特に継続した積み重ね学習が必要な科目であり、渡日後の第二言語（日本語）習得期の学習空白期間により、算数、数学の大事な基本的知識が抜けている子どもも多く、そういう部分をこうしたサポートの時間に補うことも重要な役割である。
- ・小学生では国語も多い。教科としての国語で読み書きをサポートすることにより、子どもにとっては日本語のレベルアップにつながっていくことが十分にうかがえる。

⑨ 学習サポートを受けて良かったこと、うれしかったこと（回答の原文のまま記載）

小学生	<ul style="list-style-type: none"> ・パソコンを使った ・友達ができたこと ・特にない ・ぜんぶ ・ここで勉強して頭がよくなった ・おしえてくれること
中学生	<ul style="list-style-type: none"> ・わかりやすい ・教える人があるから、とても便利です。 ・漢字がわからない時に教えてもらったところがうれしかった。 ・先生はとてもやさしい人ですごくうまく教えられました。じゅぎょうを受けて、覚えられなかった事を、ここで覚える事ができて、とてもうれしかったです。

- ・回答の日本語表現は豊かではあるが、いくつか文法的な間違いがある。話し言葉では一見問題なく日本語を駆使しているようにみえるが、書き言葉に現れる日本語の不完全さも事実として、彼らの言語状況を理解しなければならない。
- ・ジョイアの活動に通い続けていること自体が学習サポートを肯定的に感じていることの表れと言えるが、ここでの好意的な回答にはその意向がはっきり表れている。

⑩ 学習サポートで勉強しているときに、困ったこと、いやだったこと

小中学生合わせて「ない」「特にない」という回答が7名、空欄の回答が6名で、ほぼ「ない」と考えられる。他の2名はそれぞれ「べんきょうわからん」「先生がしつこかったこと」と答えている。後述するように、集中力が続かない子どもがいて、他の子どもの勉強を邪魔しにいきがちなため、そういう者には意図的にやや厳しく指導している。そのことが子ども側から「しつこい」という感想に表れていると思われる。しかし、いずれも来ることをやめず通い続けている事実を考えると、これらの回答も、勉強に関する子どもらしい自然な感想の1つと捉えることができる。

⑪ これからの学習サポートでどんな内容を希望するか（選択回答で多かったもの）

小学生	<ul style="list-style-type: none"> ・宿題以外の学習（問題集をとく、本を読むなど） 7 ・学校の教科書や宿題の手伝い 6 ・かるた、パズル、クイズなど 4 ・日本語の勉強 2
中学生	<ul style="list-style-type: none"> ・宿題以外の学習（問題集をとく、本を読むなど） 3

- ・実際に行っている内容が上位に選ばれた。しかし、学習内容については、彼らが望むこと以上に彼らに欠けている学習部分を把握しフォローできるよう、工夫が必要であることは言うまでもない。

⑫ 大人になったら何をしたいか。将来なりたいものや実現したい夢

区分・性別	回答（回答した者のみ、原文のまま記載）
小学生男子	ひこうきやさん、パイロット、消防官か警察官、特殊部隊かトラック運転手
小学生女子	花やさん、フライトアテンダント、つうやくの人になりたい・花屋さんにもなりたい、じゅういさん、今ない、とくになし
中学生男子	サッカー選手、弁護士

中学生女子	特にありません
-------	---------

- ・印象深いのは、将来の希望職業については難しい漢字の単語もきちんと書けていた子どもが多かったことで、彼らの年齢相応の思いの深さを垣間見ることができる。

⑬ 学校でどんなことが楽しいか（回答の原文のまま記載）

小学生	<ul style="list-style-type: none"> ・サッカーとドッジボール ・体育 ・歴史の本を読むこと ・いっぱいある。 ・遊び ・遊びとしゃべることが楽しい ・友達しゃべったり、じゃれあう ・友達とあそぶこと ・ともだちとあそんだり、しゃべったり、じゅぎょう中ねたり。 ・たのしいことはない
中学生	<ul style="list-style-type: none"> ・部活 ・いろいろなことができること ・友達といっしょにおしゃべりとか、いろ×②楽しい！ ・友達といっしょにいる事です。

2) スタッフへのアンケートと回答、及び分析

①&② 回答者の区分・性別

区分・性別	人数	備考
大学生・女性	8	
塾講師・女性	1	
主婦・女性	1	
計	10	

- ・回答者の他にもスタッフは数名いるが、活動自体が交代制であることや人によっては活動参加時期が断続的であることなどの理由で、回答できなかった。また、期間途中数回継続参加して、ある時から急に来なくなる、というパターンの人も多い。

③ 主にサポートした科目（複数回答）

小学生対象	算数 10、国語 10、社会 2、日本語 1
中学生対象	国語 7、数学 5、社会 5、英語 3、理科 2、日本語 2

- ・小中学生とも国語、算数（数学）が多い。ただし、社会や理科が分かっていてサポートが不要な訳ではなく、限られた時間の中でどれか 1 科目か 2 科目を選んで行っている結果ということである。
- ・中学生自身の回答で「国語」は少ないにもかかわらず、スタッフ側の回答で多くなっているのは、ほとんど休まず継続して参加した中学生 1 名がほぼ毎回国語を勉強し、その結果、スタッフ側の多数がその子に交替で関わったという背景がある。サポート算数・数学のサポートが多いのは宿題を持ってくる者が多かったことが反映しているが、子どもにとって日本語が十分でなくても解けるといふ要因があるのかもしれない。

④ サポートをして良かったこと、うれしかったことなど（回答を要約：以下同）

- ・質問してきてくれたことを教えて、それをわかってくれたとき。
- ・わかった、と嬉しそうに言ってもらったとき。
- ・日本語を話せるようになった子がいたこと。また、そのことを親が喜んでくれたこと。
- ・一生懸命やっているところを見たとき。
- ・子どもたちが「ここに来るのが楽しい」と言ってくれたとき。
- ・しばらく来ていなかった中学生の子が受験を機に久しぶりに来てくれた。ジョイアがいざという時の支えになっているように感じ嬉しかった。
- ・自分の外国人児童生徒に対する意識が上がったこと。
- ・小学生、中学生、スタッフと個性がある人たちに出会えたこと。

⑤ サポートをして大変だったこと、難しかったこと、困ったことなど

- ・集中してくれない子ども、他の子の邪魔をしてしまう子どもへの対応
- ・勉強せずに遊んでばかりいる子の子守りが大変。
- ・勉強に向かい合う気のない生徒に必要な事を教えられないとき。
- ・パソコンの使用時間を守らないこと
- ・自分の苦手分野の教科を教えること
- ・小学生の算数は、自分が今当たり前に考えていることを教えなければならず、教え方に困った（百分率など）。

⑥ 実際の教え方について気づいたこと、教え方の工夫でよかったことなど

- ・日本語の辞書を使って教えているのが良い。
- ・中学生は1対1でじっくり教えることが必要。
- ・できる限り1対1で勉強を見たほうがお互いにやりやすい。一方的に説明するのではなく、子どもに質問して答えてもらいながらやったほうが理解しやすいのではないか。
- ・単語帳を作るようアドバイスしたら作ってくれた
- ・2時間勉強するのは子どもたちにとって大変なので、時間の区切りをつけると集中した
- ・子どもの意見を聞く。興味を持たせるような話をする。話（学校の様子など）を聞く。
- ・集中力が続かないので、休憩をしっかり取る。
- ・集中力が切れたところで、興味のある本とか、カードとかを使ったりすることで、勉強を続けることができた。
- ・図を描いたり、子どもの知っていきそうな易しい言葉に言い換えたりする。
- ・簡単なことを繰り返し教え、基本的なこと（九九など）は定着させるように心がけた。
- ・子どもたちがやりたい勉強の教材をそろえておくことが大切だと思った。

- ・メーリングリストの活動報告でも繰り返し記述されていたが、集中力の続かない子ども、特に小学生にどう対応するか、他の子への悪影響をどう少なくするかが、スタッフにとって大きな課題になっているのがわかる。またそのための様々な工夫や努力が回答に述べられている。

⑦ サポートした外国出身の子どもに関する感想

- ・勉強とともに、他の子どもたちとの交流がちょっとでも子どもたちのためになればよいと思う。
- ・ジョイアに来ることは、ただ勉強しに来るだけじゃなく、友達を見つけたり、という機会を求めて来る子がいる。
- ・夏休みの宿題とか、進んでここに来て勉強しようとしている姿勢がえらいと思った。
- ・日本語をきちんと話せても、やはり漢字は苦手な子が多いと思った。
- ・小学生の音読は聞いてあげられるが、高学年になると内容の確認が必要かと思うが、それは学校の授業でやっているのではないかと思いつつ心配。
- ・少しサポートすれば、ものすごく伸びるであろう生徒が多い。
- ・小中学生はずっと（勉強を）続けていけばきっと将来大きな力になると思う（外国と日本の架け橋とか）。
- ・アクティブな性格の子は日本語の上達が早いが、内気な子はなかなか話せなくてますます引きこもってしまう。

- ・見た目は元気で素直で明るいけど、話をしているとたぶんいろいろな問題を抱えているんだと感じた。
- ・言葉遣いが汚い。日本人も含め小学生全体がそうなかもしれないが、言っていること/悪いことの区分がまだできていないと思う。根はいい子たちなのだけど。
- ・親が日本語ができない、日本の学校の勉強を知らないなどの場合、家庭学習の習慣ができず、まったく勉強についていけない子がいる。そういう子に、時間を割いてあげたいと思っても、本人が勉強嫌いになってしまっていて、勉強に興味を持ってもらうのが難しかった。勉強を教えることはできても、本人をやる気にさせることができず、はがゆい。

- ・子どもたちを取り巻く状況への理解と、がんばる姿への好印象はスタッフの皆が持っている。一方で、子どもたちの弱点や問題点、潜在的な可能性を冷静に分析している記述がみられる。日ごろ直に接しているからこそ理解できる視点が表現されていると考えられる。

⑧ この経験を踏まえ、自分が考えたことや、今後したいこと

- ・わかりやすい説明ができるように心がけたい。
- ・集中してやってくれるように、自分の教え方の技術をもっと上げたい。
- ・ここに来ている子はみんな教育レベルが高いし、積極的。本当に日本語教育が必要な子は来てないと思う。そういう子もサポートするためには、「ここに来てください」じゃなくて、私たちの方から学校に向くことが大切だと思う。
- ・日本語があまり分からない子を相手にしたり、そういう子を相手にしているところを見学したいと思う。
- ・まず、もっとスタッフの人数を増やすべき。大学でも一般でも募集したい。
- ・勉強させることが第一だけど、イベント的なこともできればいいと思う。
- ・今後も何らかの形で外国出身の子どもたちを支える団体などと関わっていきたい。
- ・これから日本にはもっと多くの外国人が住むことになると思う。そういう人たちに理解を示し、力になれる存在になりたい。
- ・多文化共生社会への理解を深めたい。
- ・ジョイアの活動を津市の教育委員会と協力して行うことは非常に深い意味があると思うが、中学校などへも行ってほしい、などの要望は、本来、行政が専門家を派遣すべきでは（ないか）、と思う。もっと教育にお金をかけるべき。

- ・自分の教えるレベルを上げたいという希望を（活動をしていれば当然であるかもしれないが）ほぼ全員が持っている。
- ・この活動から外国人の親や子どもの問題に一層深い理解と関心を持ち、今後も何らかの形で多文化共生に関わっていきたいと思う者が圧倒的に多い。
- ・日本語のあまりできない子どもは散発的に数人参加したが、2、3回来て来なくなるといいうことが見られた。スタッフの中にはこのような子どもを掘り起こし継続的にサポートできていないことについて、懸念を持っている者が少なくないと思われる。
- ・興味深いのは、活動を通じて津市教育委員会や学校の仕事を垣間見ることができ、そこから、教育行政の役割や矛盾を考える機会にもなっていることである。アンケートに行政関連の意見を書かなかった者も含め、スタッフの多くは日ごろ何らかの思いや感想を持っていることが推察できる。

5. 総括——子どもの課題と今後の活動

今回の該当期間の総括の内容は豊富であり課題も多い。ここでは、活動の現状や問題点、最近の子どもたちの状況などに関し以下の4点に絞り記述し、今後の活動継続と発展のための礎としたい。

1) スタッフ数の確保

3章の3)の活動報告にたびたび見られるように、多くの活動日の中には、子どもが多く来てスタッフ不足のとき、スタッフが多いのに子どもが少ないとき、ちょうどバランスのいいとき、様々である。子どもの数が増減するのは天候や学校のスケジュールなどでやむを得ない面も多く、いずれにしても、多めにスタッフがいる体制が理想的である。大学内での呼びかけは継続的に行っていくが、大学生だけでは休暇や試験などの関係で、時期や日によってメンバーのほとんどが都合悪いという場合もあるため、社会人、院生、学部生、卒業生など、今後とも様々な年齢や立場のスタッフの確保が必要である。

また、スタッフが多くなることにより、他の類似の活動への参加の可能性が広がる。過去に1年間継続した高茶屋の教室でのサポートは、参加した大学生メンバーにとって有意義な体験となった。2008年夏現在、この教室では参加する子どもの数が以前よりかなり増加しているとのことであり、ジョイアメンバーの数に余裕ができれば、断続的にでもサポートの再開を考えたい。また、亀山西小学校のサポート参加も、学校が津市内から30分という地理的な条件もあるが、学校内で10名以上の子どもを対象にサポートする、という貴重な経験の機会であり、将来参加できる者が多くなることを期待したい。

2) 子どもの学習規律の確立

活動報告やアンケートに見られるように、スタッフが注意し努力しているにもかかわらず学習の時間に学習に集中できない子どもが数人いるときがある。「勉強する」「休憩時間を守る」「他の者の邪魔をしない」などのルールを決めて大きく紙に書いてあるが、注意しても守らない。特殊な状況の中で成長し学習していることを考慮に入れても、特に、遊びに来ていると思われてもやむを得ないような子どもや他の子どもの勉強の邪魔をする子どもについてはそれぞれが苦慮している。一時、2時間のサポート時間が小学生には長すぎるのではないか、という意見が出、スタッフ間で1時間半の案も検討されたが、時間短縮によるプラスとマイナス両面が指摘され、結果、2時間で継続することとなった。このときの議論は、子どものサポート方法を考える良い機会にもなったようである。今後も随時、学習規律とそれに基づくサポートの方法について認識の見直しを怠らず、スタッフ全員で最善の方法を検討し実行していかなければならない。

3) 参加している子どもの背景の理解

日本で生まれ、又は幼い頃に来日し日本に11年以上滞在している場合、日本人アイデンティティを持っている者が比較的多い(永田・藤本, 2007)。ジョイアに参加した子どもの多くもこのような状況にあると推測される。そのため、自身の外見と内面のギャップ、親のアイデンティティとのギャップ、親の日本語力不足によるコミュニケーション不足、日本での親の被教育経験がないことによる家庭内教育力の不足、などの問題を抱えていることを理解する必要がある。スタッフは一見日本語に問題がないように見える子どもを実際にサポートしてみて、彼らの基本的な知識の不足、という事実と遭遇することが多い。そして、サポートする機会を重ねれば子どもの力が大きく伸びることも感じており、活動報告やアンケートの回答の随所にそのことが現れている。このように各自がサポートして体感する子どもの状況を初心者や新スタッフにも伝え、日常的にサポート関係者の共通の理解にしていく必要があると思われる。

4) 日本語サポートを必要とする子どもの学習サポートの問題

見てきたように、サポートを受けている子どもは、多少の程度の違いはあるが、日本語が比較的流ちょうに話せる者が多い。一方で日本語があまりできない子どもが時折来ても長続きしない。本来は最も厳しい問題を抱えているこうした子どもが継続して参加し、スタッフで支援することができないか、重要な課題である。前述の津市教育委員会の統計数値の「日本語指導が必要な外国人児童生徒」の言語別内訳では「ポルトガル語」が小学生 148 名、中学生 55 名に上る。これらはほぼブラジル出身者と見られ、公立学校に在籍するブラジル人小学生 182 名のうち 81.3%、同中学生 71 名のうち 77.5%を占めている。最も多いブラジル人児童生徒の 8 割が基本的に日本語指導を必要とする対象になっており、日本語支援とともに学習支援も必要な子どもたちである。一方、ジョイアにはボリビアの子どもが多く参加し、日本語が比較的堪能なレベルにある子どもが多い。数的に、より多いはずのブラジル人児童生徒の参加が相対的に少なく、来ても長続きしないのはこうした日本語レベルの問題と無縁ではないと思われる。学校現場で様々な努力、取り組みが行われていることを十分理解しつつ、その中で大学生が言葉と学習のサポートにボランティアでどう関われるか、役割や意味が一層問われていくことになる。

参考文献

- 津市教育委員会 2008『外国籍児童・生徒数調査（津市）』（報告書）
- 永田素彦・藤本久司 2007「日系南米人の若者のアイデンティティと生活体験の関係——三重県でのアンケート調査をもとに」『人文論叢』第 24 号、三重大学人文学部文化学科 pp72-73
- 藤本久司・江成幸 2007「外国出身中学生への学習支援活動—大学生ボランティア活動を中心とした試み」『人文論叢』第 24 号、三重大学人文学部文化学科pp193-204
- 法務省 2008『平成 20 年版在留外国人統計』（報告書）
- 法務省入国管理局 <http://www.moj.go.jp/PRESS/080601-1.pdf>
- 三重県 2008『県内の外国人登録者数が 5 万人を超えました——外国人登録者数調査（平成 19 年 12 月 31 日現在）の結果』（報告書）
- 三重県教育委員会 <http://www.mie-c.ed.jp/koukou/boshu/h 20/youkou.htm>
（平成 20 年度三重県立高等学校入学者選抜実施要項・三重県立特別支援学校入学者募集要項）
- 三重短期大学地域問題総合調査研究室 2008『津市における外国人児童・生徒の就学状況調査報告書』（報告書）

